

平成23年度 第66回入学式 式辞

東日本大震災から4週間目を迎えました。あまりにも多くの命が奪われ、行方不明になられた方々の捜索は依然続いています。亡くなられた皆さまに衷心から哀悼の意を表すとともに、被災された皆さまに心からお見舞いを申し上げます。

被災地では、今なお厳しい状況が続いていますが、日本全国、世界中に支援の輪が広がり、早くも復興への歩みが始まっています。日本中が今ひとつになろうとしていることを強く実感しています。そうした中で昨日、皆さんの入学を寿ぐように、本校の桜が満開になりました。285名の新入生の皆さん、保護者の皆さま、ご入学おめでとうございます。過去最高となった昨年度も優る高い倍率を乗り越えて本校生徒の仲間入りを果たした皆さんを私たちは心から歓迎します。

さて、大震災とその対応が続くさなか、私は、敬愛する恩師から以前頂戴した「ちち ははの記」と題した小冊子を読み返してみました。この恩師は大学時代からご指導をいただいている方で、分子生物学から脳科学、情報環境学など次々に学問領域を広げている先生です。恩師のお父様は戦前、ある県の県会議長を務められ、私財をなげうって村の聡明な子供たちを上級の学校に通わせていた方だそうです。そのご両親の三十三回忌を偲んで書かれたのが、この「ちち・ははの記」です。

「こよなく貴い 授かりものへの感謝」と題した文章は、「最近私は、大学の講義で、生きものの生涯を決定するのは、遺伝情報と環境であると教えています」という言葉から始まっています。

ご存知のように、私たちは父親と母親から様々な資質や能力の芽を、膨大な遺伝情報という形で受け継ぎます。遺伝子に書かれていないことはどんなに努力してもできません。一方、受け継いだ資質能力の芽の中で、読み起こして実際に使えるのは、全体の1%~よくて4%程度とされています。もう一つ生涯を決定するのが「環境」です。なかでも、「三つ児の魂百まで」とはよく言ったもので、幼い頃の環境、これもまた父と母が作り出す人間環境が一番大きな影響を及ぼします。そこで教えられたことは、「生まれつき」と変わらなくらい頑丈に脳の中に染み込むそうです。生物学ではこれを、刷り込み、インプリンティングと言います。

恩師のご両親が子供たち全員に対して徹底して教え込み、刷り込んだ事柄は次のように整理できるそうです。「人間は自分のために生きるのではない。何か大きく崇高なもののために生涯を捧げるものである」「つまり、世のため人のために生きなければならない」「自分中心になるな」「誤解や孤立を恐れるな。一人だけでも真実を守れ」「権力、地位、金銭を求めてはいけない。またその尺度で人を評価してはならない」「不義不正を見逃してはならない」「競争心を持ってはならない」「弱者を大切に、巨悪に立ち向かうことをためらってはならない」「しかし秩序は守れ」「謀略をめぐらしたり、人の失策につけ込んで自分の利益を計るのは最も恥ずべきことだ」

しかし、当時は、世の中がどんどん近代化していく過程で、他人のことより自分最優先という生き方が主流を占めるようになっていました。教え込まれた通りに生きていこうとすればするほど、現実社会との板ばさみになり、「下手な世渡り」しかできなかつたそうです。どうしたらその教えと

縁を切れるのか、離れられるのか、苦悶する日々が続いたと言います。実は、その先生のご兄弟は優秀な方ばかりで、ご本人だけはかなり落ちこぼれで周囲をやきもきさせたとようです。ご本人も自分だけが頭も体力も劣っている、どうせ自分は他の兄弟のように人並みにはできないと思い込み、その劣等感がさらにご本人自身を苦しめたようです。

ご両親は、そんな劣等感を察知してか、たくさん兄弟がいる中で、その恩師のためだけに特別の教を残されたそうです。「普通の人にできていることは何事でもできないはずはない。できないとすれば、その原因はすべて自分にある」「途中で止めてしまっただけでは、できることかどうかわからない。できないことはできるようにするまでやり続けなければよい」「人のやることをよく見ていること。何かつかめるはずだ」「同じ失敗を二度と繰り返すな。次にやる時は何か新しい工夫を加えよう」「謙虚でなければ成長しない」「人を羨んだり妬んだり絶対にしてはならない」「苦労を不幸と思っただけではいけない。人間は苦労によって素晴らしいものに磨き上げられる」「たゆまぬ工夫、努力以外に道はない。それは必ず報いられる」そして最後が、私は特に気に入りました。「元気を出して頑張れ」

ここには特別なことは何も書かれていません。いわゆる「優等生」も「劣等生」も関係なく、誰でもができることばかりです。ただ、粘り強くということは、すべての教えに貫かれているように思います。私の恩師は、結局は、父母から教えられた、愚直ともいえるこのスタイルを、普通の人から遅れること20年、40歳を過ぎた頃から本格的にやり始めて自らの生き方として確立され、今や日本を代表する研究者とされています。ちなみに、この恩師のご指導をいただき、教育のあるべき姿を、去年の創立70周年記念誌に書かせていただきました。同窓会からの入学祝として一人ひとりに教室で配られますので、ぜひ、読んでください。

この小冊子の最後に、恩師はこう書いています。「父上、母上からこの上ないものを授けていただきました。しかし、私自身が最近までそれを洞察できず、言い知れぬ不満を抱いてきました。本当に申し訳なく、また恥ずかしく思います。このような親不孝をこれからの人生を通じて幾分なりとより戻したいと願っています」

これを、今年度入学してくる君たちにどうしても紹介したかったのには訳があります。それは、この小冊子で父親母親の教えとして語られている日本人の生き方が、日本人の価値観が、日本の伝統が、このたびの震災で苦難を抱えた人々を支える鍵として、世界中に紹介され、世界が驚きをもって注目しているからです。

イギリスのBBCニュースは、これだけの震災に遭いながら、犯罪がほとんど起こらず、食料の配給の列に日本人は整然と行列を作って並んでいる徹底したマナーの良さに対して、日本人は、自分の欲望を抑制する力をもっていると賞賛の言葉を送っています。

加えて、日本人は「独立の精神」に溢れているともたたえています。政府に怒りをぶつけて何とかしろという人が押し寄せるのが普通なのに、日本人は、誰かに依存したり責任を押し付けず、その時、その場で、全体にとってもっとも適したやり方を自分たちの頭で考えて実行している。その資質を高く評価しているのです。

さらに注目されているのが「コミュニティ」の力です。私事で恐縮ですが、茨城県に住んでいる90歳になる両親は、地震の直後に何日間も電車や電気、水道が止まる中で、ご近所から飲み水や暖かい食べ物が届き、大丈夫？と言って久しぶりの人も含めて近所の方がしょっちゅう尋ねてきてくださり、本当に助かったと言っています。コミュニティはもはや日本では姿を消してしまったのではないかと、復活は無理かもしれないとの諦めも正直に言うてありましたが、コミュニティは、東北にも関東にも生きていた、人々の心にちゃんと生きていたことに深い感銘を覚えます。

この大震災を機に、人の生き方が、世の中のあり方が、文明のあり方が問われています。この先日本では、自我を絶対化し、モノの豊かさを競い合うような世の中から、生きとし生けるもの全ての命、人と人との絆を大切に、互いに思いやり支えあう世の中、新しい文明の創造へ向かうに違いないと私はにらんでいます。そこで直すべきは、他の誰でもない日本人の日本を見る目なのです。

振り返ってみると、昨年度末のクリスマスから平成23年度のお正月にかけて、全国各地にいるタイガーマスクの伊達直人から届けられた善意のランドセルでわが国は静かに広く沸き立ちました。日本は捨てたもんじゃない、すごい、私ばかりでなく多くの人がそう実感したはず。大震災を経て、その実感は確信に変わりつつあります。

日本はいま、間違いなくこれまでにないピンチです。でも、ピンチを不幸だと決めつけるのは早すぎるように思います。私たちは、ピンチをチャンスに変えることのできる頭脳を、その頭脳を世のため人のために活かす「利他の志」を、人と人が強い絆で結ばれたコミュニティを創りあげる智恵を、自らの遺伝子の中に、そして歴史と伝統のあるコミュニティ環境の中に持ち続けています。

武蔵丘高校は2年前、コミュニティと呼ぶに相応しい学校を創る歩みを開始しました。その歩みを始められたのは、ここに集う若者の中に、コミュニティの礎となる「友との絆」「利他の志」の芽が生き続けていたからです。その芽を伸ばす取り組みは、君たちの先輩たちの努力でかなりの進展を見せています。そこに、君たちの新しい力が加われば、ますます豊かなコミュニティを築きあげることができる、ピンチをチャンスに変えて、もっと素晴らしい世の中を作り出すことだって不可能ではないと確信します。

結びに保護者の皆さまにお願いします。保護者として親として、お子さんに大事にして欲しい生き方を、一つだけでいいので伝えてあげてください。たとえばお子さんにつけた名前にはひとときわ深い思い入れがあったはず。ご両親でご相談の上、今晚ぜひ話してあげてください。そして生徒諸君は、その言葉を、きちんと正座して受け止めなさい。

新入生の皆さんが、全力で自らの頭脳と心と体とを鍛え、「友との絆」と「利他の志」を磨いて新しいコミュニティ作りの一翼を担い、社会に役立つ人間へと成長を果たせるよう心から期待し、入学式の式辞といたします。

平成23年4月7日

東京都立武蔵丘高等学校長 谷島 昭